

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	比較文明学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	現代心理学部 教授		森 秀樹 印		
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>		個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名	
研究課題名	中国医学思想研究－近代中国における西洋医学との接触を背景に－				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科 比較文明学専攻 D4		松本 秀士 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2006 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、近代日中における医学史を、諸医書の検討により明らかにするとともに、この頃の医学史の基礎資料を作成する意味として、特に、人体解剖学と解剖学用語の訳語を焦点に分析する。まず、近代中国における初期的な西洋医学の移入で大きな役割を果たしたとされる『全体新論』の伝えた人体解剖学の性質を再検討する。次に、人体解剖学の専門書として編訳された『全体闡微』『全体通考』の両書、両書の編訳のベースとなった原書、ならびに両書の性質を示す諸史料を検討することを通じ、近代中国に移入した人体解剖学の性質を明らかにする。さらに、中西医匯通派と呼ばれる医家が受容した西洋医学の内容を検討し、近代中国における西洋医学の具体的受容の様子を明らかにする。また、『全体闡微』『全体通考』の両書がベースとした原書が、日本の明治初期に『解剖訓蒙図』として編訳されていることから、これについても検討する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 西学東漸 } { 近代日中医学史 } { 人体解剖学 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

英国人医療宣教師ベンジャミン・ホブソン(Benjamin Hobson)の編纂した中国文西洋医学書『全体新論』(1851)は、中国にはじめて近代的な西洋解剖学の知識をもたらしたことで知られる。本研究では、『全体新論』に続く中国文西洋医学書の展開、ならびに中国文西洋医学書に対する中国伝統医学上の反応を示すことを目的とした。

従来の研究では、『全体新論』が近代中国に西洋の人体解剖学をもたらしたはじめての中国文西洋医学書であるとされてきた。しかし、本研究による検討では、『全体新論』が専門レベルでの西洋医学・専門レベルでの人体解剖学を伝えたものとはいえないことがわかった。

ホブソンが去った後の中国では、ポストホブソンの明確な意識の下、より本格的な内容を備えた中国文西洋医学書が次々と刊行された。そして、『全体新論』が、教養レベルの人体解剖学しか伝えなかったことを考慮して刊行されたのが、米国人医療宣教師オスグッド(Dauphin William Osgood)の編訳による『全体闡微』(1881)で、この書が事実上、中国初の本格的な人体解剖学の専門書となった。この書は、広東・上海・福建を中心に活動する医療宣教師たちの統一的な要請をオスグッドが引き受けたことによって編纂されたもので、特に、当時の西洋の解剖学用語の中国語訳を体系的に定める役割を担った。そして、『全体闡微』で定められた西洋の解剖学用語の中国語訳が、後の医療宣教師たちによる中国文西洋医学書編纂の基盤となったという意義があることを本研究で明らかにした。

『全体新論』が後の医療宣教師たちの中国文西洋医学書編纂の編纂に供されなかったのは、中国語に訳出された解剖学の語彙に、原語が示されていなかったことによる。後のホブソンの『医学英華字釈』(1858)にも難点があり、それは訳出された解剖学の中国語語彙がごく一部のものであったこと、大部分は原語に対して中国語による説明文が示されるのみであったことである。

『全体闡微』は、ヘンリー・グレイの *Anatomy, descriptive and surgical*(初版 1858、以下「グレイの人体解剖学書」と呼ぶ)をもとに編訳された。『全体闡微』は、解剖学用語の中国語訳を定める意図で刊行され、当時の広東・上海・福州を中心に活動する医療宣教師たちの間で広く支持された。

また、日中に伝わった西洋の人体解剖学の医学史的な側面で比較すれば、従来、大きな評価が与えられていた『全体新論』は、やや古い内容を伝えていたことがわかる。そして、『全体闡微』が当時の最新の西洋の人体解剖学を伝えたのである。

この他、ダッジョン(John Dudgeon)の編訳による『全体通考』(1886)もグレイの解剖学書をもとに編訳され、清朝中央政府の附属機関である京師同文館より刊行されたが、『全体闡微』と異なる訳語が用いられた。つまり、近代中国における西洋医学の移入で、グレイの解剖学書は重要な役割を果たしたが、解剖学用語の中国語訳は、中央と地方とで不統一に終わったのである。

一方、中国伝統医学の流れの中で扱われた中国文西洋医学書は、辛亥革命以前に限れば、依然として『全体新論』の伝えた教養レベルの西洋の人体解剖学の解釈にとどまり、本格的な人体解剖学の内容にまでは立ち入らなかった。

このように近代中国においては、医療宣教師が直接的に伝える西洋医学と、中国伝統医学上で扱われる西洋医学という、二つの異なる流れがあった。

日本の明治初期にも、グレイの人体解剖学書をもとに編訳された『解剖訓蒙図』(松村矩明編訳 1872)が刊行された。『解剖訓蒙図』の訳語は『解体新書』の訳語の流れを受け継いだものである。訳語を焦点に検討した結果、『解剖訓蒙図』が、『全体闡微』『全体通考』の二著に影響を与えた形跡は認められなかった。従って、近代中国における西洋医学移入の流れは、日本の流れとは異なった展開であるといえる。

これまでの中国医学史研究では、『全体新論』が西洋医学の最も基礎となる人体解剖学を中国に最初に伝えたという事項のみが偏って評価されてきており、『全体新論』が伝えた人体解剖学の具体的な意義については、十分に検討されてこなかった。そして、『全体新論』に対する偏った評価の陰に隠れるかたちで、『全体闡微』の意義については十分に論じられてこなかったのである。

研究成果の概要 つづき

本研究では、従来の表面的な研究に対して、大きく踏み込んで実質的内容を明らかにすることができた。

※ 公表は、2007年12月31日まで、不可とさせていただきます。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 日本医史学会『日本医史学雑誌』(2006年12月に論文として投稿し、当該学会査読委員会の審議を経て2007年4月に原著論説として採用の通知を受けた。現在、当該学会の指示に従い、最終校正の段階にある)

① 近代東西言語文化接触研究会『或問』に投稿準備中。

④ 本学文学研究科博士学位申請論文の第5章(全9章構成)の一部として、現在執筆中(2007年度中に提出予定)。